

[トップ](#) > [実績](#) > [セミナー・講演・執筆](#) > 進化する観光ユニバーサルデザイン(連載) 歴史を超えて～誰もが旅を楽しむ時代～

セミナー・講演・執筆

進化する観光ユニバーサルデザイン(連載) 歴史を超えて～誰もが旅を楽しむ時代～

～

執筆

研究員名: [草薙威一郎](#)

番組名・雑誌名: 公明新聞・執筆 2004年10月1日

放送局・出版社: 公明党機関紙局

年齢、性別、言語、能力の違いの有無にかかわらず、だれもが安心して使えるように配慮したユニバーサルデザインの製品やサービスが日進月歩で進化している。観光のUD(ユニバーサルデザイン)もその中の一つといえる。これから、すべての人が旅を楽しむための観光のUDについて紹介して行きたい。なお観光UDは観光バリアフリーとまったく同じ意味ではないけれども、使い分けられない場合もあるのでご了承いただきたいと思う。まず今回は観光UDの歴史について述べたい。

観光UDの歴史はそれほど昔からのことではない。1950～1960年代にかけて、わが国は徐々に戦後の痛手から立ち直り経済発展の道を歩みだした。しかしこの時点では、まだ人々は生活を楽しむということよりも生活の安定を目指す段階であった。したがって旅を楽しみたいと思う配慮の必要な人にとっては、「障害者割引」という経済的支援の段階に留まるものだけしかなかった。

1970～1980年代の20年間で、個人の生活面や文化面、社会的なインフラ基盤は国際的にもかなりの水準に達した。1970年の大阪万博では6,000万人以上の入場者があり、団体旅行だけでなく個人旅行も一般的になってきた。また旅のUDについては、電車の座席に「優先席」が設けられたり、交通機関に盲導犬の同行ができるようになったりして、サービス面も徐々に配慮されるようになってきた。

1990年代に入り、ようやくすべての人が旅を楽しむ時代の萌芽がでてきた。1995年の観光政策審議会の答申では「すべての人は旅をする権利がある。旅には自然の治癒力があり、とりわけ障害者や高齢者などにとっては貴重な機会である。」と述べられた。このころから、建築物のバリアフリー化を進める「ハートビル法」、交通機関のバリアフリー化のための「交通バリアフリー法」や各県ごとの「福祉のまちづくり条例」が制定され、社会全体のバリアフリー化が急速に進みだした。一方、航空会社では体の不自由なお客様の専門相談窓口が作られたり、バリアフリー旅行を専門に扱う旅行会社もでてきたりした。

そして2000年を過ぎてからも、たくさんの駅にエレベーターやエスカレーターがつくと同時に、多くのホテルや旅館でバリアフリー化の取り組みが行われている。またインターネットでもバリアフリー観光情報も充実してきて、だいたいが旅行しやすい環境は整ってきている。これからは一部の人への特別な配慮をするバリアフリー化ではなく、はじめから高齢の人や子ども連れ、外国人や体の不自由な人も旅行を楽しみたいということを理解して、そのための方策を用意してお迎えする時代になってきた。

そこでこれから少しずつ国内海外の観光UDの知恵と技を紹介することによって、すべての人が旅を楽しむ参考になればと願って連載を始めて行きたい。

[連載 第2回へ](#)

[バックナンバーから探す](#)

[2010年](#)

[2009年](#)

[2008年](#)

[2007年](#)

[2006年](#)

[2005年](#)

[トップ](#) > [寒鏡](#) > [セミナー・講演・執筆](#) > 進化する観光ユニバーサルデザイン (連載) 海外の現状～法律、社会基盤整備などで格差～

セミナー・講演・執筆

進化する観光ユニバーサルデザイン (連載) 海外の現状～法律、社会基盤整備などで格差～

執筆

研究員名: 荻原威一郎

番組名・雑誌名: 公明新聞・執筆 2004年10月8日

放送局・出版社: 公明党機関紙局

[←連載 第1回へ](#)

昨年のがわの海外旅行者数は、SARSやイラク戦争などの影響があり1,330万人と低調であったが、この5、6年は1,600～1,700万人の水準で推移している。年間に国民の約7人に一人の割合で海外旅行に行くなかで、旅行中に何らかの配慮を必要とする人はどのような旅行をしているのだろうか、旅行先の観光UD(ユニバーサルデザイン)の現状はどうなっているのだろうか、ということ今回は考えてみたい。

日本人がよく訪れる観光地をあげてみよう。日本を発って東に行くとハワイ・ホノルルのワイキキ海岸、アメリカ・サンフランシスコのゴールデンゲートブリッジ、ロッキー山脈を越えて、オランダのテーマパーク群やニューヨークの摩天楼に着く。そこから大西洋を越えてヨーロッパへ。イギリス・ロンドンのウェストミンスター寺院や大英博物館、パリの凱旋門やノートルダム寺院、スイス・アルプスの山々を越えて、ローマのサンピエトロ寺院へ。そこからまたインド洋を越えてオーストラリアのゴールドコースト海岸からバリ島のビーチへ。タイ・バンコクのワット・ポー寺院、香港のビクトリアピーク、中国・北京郊外の万里の長城を見て日本に戻ってくる。また最近、シニアの人には世界の文化遺産や自然遺産を見る旅が大変人気があるという。

これらの観光UDをみてみると、アメリカ、カナダ、オーストラリアなど歴史が新しく、バリアフリーに関する法律が整備されている地域は旅行しやすいと思うし、ヨーロッパでは人々は親切であるが、石づくりの街や建物は歩きにくそうな印象がある。またアジアの国々は素朴ではあるが、社会的インフラが未整備でバリアフリー化があまり進んでいないように思える。大体のところでは、これらの印象は体験上、合っているように思う。しかし旅はその人の個人的体験であるから、不便なときに思わぬ温かい親切があるとその旅が好印象に変わるようなこともあるかもしれない。

世界的潮流をみれば、障害のある人もない人も同等の社会参加を促進するノーマライゼーションの流れとともに、アメリカでは1990年に社会のバリアフリー化を強力に推進する「ADA(障害のあるアメリカ人法)」が成立し、EU各国では2000年に社会全体でユニバーサルデザインを進める決議を行っている。交通機関について言えば、アメリカ・サンフランシスコのBART(新交通システム)はすべての車で車いすでも介助者なしに利用できるし、イギリス・ロンドンの1万9,000台のすべてのタクシーにはスロープが備えてあり車いすのまま乗り降りできる。またスウェーデン・ストックホルムの地下鉄では乳母車に赤ちゃんを寝かせたまま利用できるように設計されている。そしてブラジル・クリチバ市(人口160万人)の主要交通手段である路線バスでは、すべての停留所がバスの床面と同じ高さのチューブ型の統一した形で作られており、すべての人に使いやすく作られている。

一方で、観光のUDについては徐々に旅行しやすい環境づくりは進んでいるものの、世界遺産には現状維持を目的とするためにバリアフリー化の規定はない。しかし今年8月にはアテネ・パラリンピック開催に合わせて、アクロポリスの丘に登るためのエレベーター設置のニュースもあるように、美しい景観になじむ観光UDは今後進化してゆくことだろう。

[連載 第3回へ](#)

[バックナンバーから探す](#)

[2010年](#)

[2009年](#)

[2008年](#)

[2007年](#)

[2006年](#)

[2005年](#)

[トップ](#) > [実績](#) > [セミナー・講演・執筆](#) > 進化する観光ユニバーサルデザイン(連載)先岐阜県高山市～きめ細やかな配慮 随所に～

セミナー・講演・執筆

進化する観光ユニバーサルデザイン(連載)先岐阜県高山市～きめ細やかな配慮 随所に～

執筆

研究員名:草薙威一郎

番組名・雑誌名:公明新聞・執筆 2004年10月15日

放送局・出版社:公明党機関紙局

[←連載 第2回へ](#)

進化する観光UDを紹介する3回目では、これまでの歴史や海外事情に続いて国内の先進地事情を取り上げたい。

今回紹介する岐阜県高山市は、古い町並みや春秋の高山祭りで全国に知られ、「飛驒の高山」として親しまれている観光地である。周囲は東に乗鞍、穂高の北アルプス連峰、西に加賀の白山に囲まれた自然だけでなく、まちの中央を南北に流れる宮川をはさんで、高山陣屋(国指定史跡)に代表される武家文化、上三之町や日下部民芸館(重要文化財)にみられる町家文化、合掌造りの「飛驒の里」の山村文化が一体化した「小京都」と呼ばれる歴史のまちでもある。

高山は1970年代のディスカバー・ジャパン・キャンペーンで全国的に知られて観光が盛んになった。ところが交通が不便なせいもあり、1980年代から観光客数が徐々に減少してきた。そのような中で、土野守・現市長は1996年に「住みよい町は行きよい町 バリアフリーのまちづくり」を掲げて「福祉観光都市」を目指すことを宣言した。市が最初に行ったことは、首都圏などから体の不自由な人や高齢の人に高山を見てもらって、観光のバリアフリー化に必要な課題を集めることだった。このモニター旅行は現在まで15回以上も継続実施されている。訪問したモニターから得られた改善意見から、市当局は(1)車道と歩道の段差の解消、(2)80ヶ所以上の車いすトイレ(多目的トイレ)の設置、(3)道路の暗渠(あんきょ)蓋の整備、(4)道路の端端の休憩用ベンチの設置、(5)観光客への車いすの貸し出し、(6)「飛驒の里」での車いす見学コース設置、(7)巡回福祉バス「のらマイカー」の運行、(8)旅行者向けの「車いすおでかけマップ」発行、(9)事業者向けのサービスマニュアル「おもてなし365日」発行、(10)手話案内アニメも入れた観光情報端末の設置などの施策を継続的に進めた。また観光地の重要な要素である旅館・ホテルもバリアフリー化に動き出し、高山グリーンホテル、ひだホテルプラザ、平野屋などのユニバーサル・サービスは全国的にも評価されている。

時あたかも松本市方面からの阿房トンネルの開通や、東海自動車道の延伸も相まって、観光客数はまちのバリアフリー化に伴い徐々に増え始め、近年では年間観光客数300万人をコンスタントに記録するようになつた。

筆者が訪れるたびに、高山では次々に新しい試みが実行され、少しずつまちが変っていることを感じる。また全国的には「シャッター商店街」というさびれた中心市街地が問題になっているに対して、高山の商店街は落ち着いてはいるが、息づく活気が感じられる。また観光客にとって大切なトイレでも、まちなかの標識に「左にXXメートル、右に〇〇メートルにトイレ」と矢印で場所を示すきめ細やかな親切さが心に沁みる。

来年2005年には高山は、周辺の市町村合併に伴い日本で最も面積の広い市になるとのことである。一方では観光のユニバーサルデザインは、終わりの無いたゆみない努力の集積である。今後広くなった「新・高山市」においても持続的に観光UDが進むことを高山ファンとしては望みたい。

[連載 第4回へ](#)

[バックナンバーから探す](#)

[2010年](#)

[2009年](#)

[2008年](#)

[2007年](#)

[2006年](#)

[2005年](#)

[トップ](#) > [実績](#) > [セミナー・講演・執筆](#) > 進化する観光ユニバーサルデザイン(連載) 温泉地の入浴～移動可能な一段の工夫必要～

セミナー・講演・執筆

進化する観光ユニバーサルデザイン(連載) 温泉地の入浴～移動可能な一段の工夫必要～

執筆

研究員名: 草薙威一郎

番組名・雑誌名: 公明新聞・執筆 2004年10月1日

放送局・出版社: 公明党機関紙局

[←連載 第3回へ](#)

国や日本観光協会が行う観光調査によれば、国民の過半数は年に1回以上の宿泊を伴う観光旅行を行っている。観光旅行の目的では、名所旧跡を訪ねたり見物・行楽したりすることが最も多いが、温泉を楽しむことも毎回上位に入っている。またわが国は、ドイツや中欧のチェコやハンガリーと並ぶ世界でも有数の温泉大国であり、古来より湯治・療養など温泉を有効に活用してきたといえる。そこで今回は、老いも若きも広く人気のある温泉地の観光UDについて考えてみたい。

温泉地のユニバーサルデザイン化は大変困難な課題である。これまで筆者の経験でも温泉旅館の大浴場で苦勞したケースは、かなりの回数を数える。特に車いすを利用する人にとって、大きなお風呂で温泉を楽しむことは大きな喜びであるが、その温泉にスムーズに入れることは大変少ない。最近でこそ新しい施設ではなるべく段差の少ない温泉づくりに努力しているので楽にはなったが、昔からの温泉では車いす利用者の温泉利用は考えの中に入っていなかった。だから古くは山間部の一軒宿にしる、高度経済成長時代の大型旅館にしる、大変階段の多い構造になっていることが多い。またようやく大浴場にたどり着けたとしても、浴槽に入るまでが段差が多く、すべりやすい。

これまでの経験を述べてみる。(1)和歌山県の有名な洞窟の中にある温泉に電動車いす利用の人と二人で行った。温泉の縁まで車いすで行き、浴槽に入るときと着替えのときだけ手伝った。(2)真冬の伊豆半島の温泉旅館の屋上露天風呂に車いすの人と入った。床は寒さで凍っていたので、着替え、入浴順序など綿密に打ち合わせて転ばないように注意した。(3)眼の不自由な人と入ったとき、まず浴場の入り口で、時計の形に合わせて「12時の方向に浴槽、10時の方向に露天風呂に行くドア、3時の方向に洗い場がある。」と大体の形を説明すると良いといわれた。(4)盲ろうの人(目も耳も不自由な人)と入った。手を引きながら浴槽の縁や洗い場の蛇口などを触ってもらい、浴場の形を理解していただいた。(5)団体で入るとき、脱衣を手伝う人、浴槽までお連れして出入りをお手伝いする人、体を流すお手伝いをする人という具合に「流れ作業」でお手伝いせざるをえなかった。

これらの例のように、すべての人が楽しめる温泉地を作ることは容易ではない。しかしながら最近の温泉施設は何か努力している施設は多くなった。その際の工夫としては、なるべくスロープなどを用意して段差をなくす、出入り口や浴槽周辺の必要な場所にできる限り手すりを多く設置する、脱衣場や浴場には一休みできるシャワーチェアを置く、もし入浴の手助けが必要な場合にはヘルパーなどを頼めるしくみを作っておくなどのことをしている。

昨今、温泉成分や加水・加温、循環などの問題で温泉地が話題になることが多い。しかし一方でこのような地道なUD化への努力によって、温泉の価値が高まることも忘れてはならないだろう。

[連載 第5回へ](#)

バックナンバーから探す

[2010年](#)

[2009年](#)

[2008年](#)

[2007年](#)

[2006年](#)

[2005年](#)

[トップ](#) > [実績](#) > [セミナー・講演・執筆](#) > 進化する観光ユニバーサルデザイン(連載)「歴史的建造物～改修した時代の価値反映～」

セミナー・講演・執筆

進化する観光ユニバーサルデザイン(連載)「歴史的建造物～改修した時代の価値反映～」

執筆

研究員名: 草薙盛一郎

番組名・雑誌名: 公明新聞・執筆 2004年11月5日

放送局・出版社: 公明党機関紙局

[← 連載 第4回へ](#)

前回述べた温泉地に続いて、国宝や重要文化財などの歴史的建造物のバリアフリー化、UD化も大変困難な課題である。今回はその課題などについて述べてみたい。

1998年冬、長野県では冬季オリンピックのあと長野パラリンピックが開催された。この時期に国宝の本堂を持つ長野善光寺では、世界からの足の不自由な人々にもこの国宝建築物を見られるように、本堂脇に長い仮設スロープを設置した。この措置は国宝を管理する文化庁と話し合った結果である。なおこのときの立派な仮設スロープは現在でも多くの人の役に立っている。

アメリカのADAガイドライン(障害のあるアメリカ人法による指針)によると、登録された歴史的建造物においては、よほど大きな負担を与えない限り、(1)建物の入り口までのアクセス、(2)建物内の順路の整備、(3)車いす対応トイレの設置、(4)目や耳の不自由な人に対する工夫をしなければならないとされている。わが国においては、まだこのような法的な整備基準はないが、本年(2004年)10月に改正された「京都府福祉のまちづくり条例」では、500平方メートル以上の神社、寺院、教会についてはバリアフリー化に努力することになっている。

そもそも建造物文化財のバリアフリー化、UD化については、どのように考えたら良いのだろうか？わが国の文化財保護法では、法律の目的として、文化財を後世まで伝えるために保護すること、文化財を国民の財産として広く理解してもらうことの2点をあげている。しかし建造物文化財は一度改修すると二度と元どおりに復元することはできない。またあまりにも「現代的な」改修は周囲の風景や景観を壊し、文化財そのものの持つ価値を失ってしまう恐れもある。

すべての人に文化財を楽しむ方法にはいくつかの試みが行われている。それらは、(1)横浜市開港記念会館(重要文化財)や東京浅草寺のように景観を損ねないような位置にエレベーターをつける方法、(2)善光寺を始め京都の三十三間堂、二条城、西本願寺、東本願寺のように仮設スロープの設備をつける方法、(3)京都の竜安寺石庭での目の不自由な人のために石庭のミニチュアを作り触って理解してもらう方法、(4)東京明治神宮や三重県伊勢神宮での玉砂利でも行ける車いすを貸出する方法などである。筆者の見た興味深い試みは、東京の旧・近衛連隊司令部(重要文化財)の建物を利用した東京近代美術館工芸館の場合である。この建造物は外観と1階ホール部分を重要文化財としての指定を受けた。つまりこの建築物の真の文化性(オーセンシティ)は、外観の美しさとホール部分のインテリアにあるとしたのである。だから、文化財の指定場所以外のところではトイレやエレベーターなどを設置しているが、それらはもちろん美術館らしい清楚なデザインとなっている。

このように歴史的な文化財の改修は、改修した時代の文化に対する考えや社会の価値観をそのまま反映する試みになる。それだけに我々は今、後世の人々から現代の知恵と工夫が試されているのである。

[連載 第6回へ](#)

[バックナンバーから探す](#)

[2010年](#)

[2009年](#)

[2008年](#)

[2007年](#)

[2006年](#)

[2005年](#)

[トップ](#) > [実績](#) > [セミナー・講演・執筆](#) > 進化する観光ユニバーサルデザイン(連載)「次代のツーリズム～同質で同等の楽しみを享受～」

セミナー・講演・執筆

進化する観光ユニバーサルデザイン(連載)「次代のツーリズム～同質で同等の楽しみを享受～」

執筆

研究員名: 草薙威一郎

番組名・雑誌名: 公明新聞・執筆 2004年11月12日

放送局・出版社: 公明党機関紙局

[←連載 第5回へ](#)

これまで本欄では、観光UDの歴史、世界の現状、日本の事例、困難な課題などについて述べてきた。少し硬い文章にはなるけれど、この辺で私の考える今後のツーリズムのあり方を述べてみたい。

これまでの日本のツーリズムのあり方は、元気な人が忙しい旅行に便利のように発達してきた。そこで達成された快適で効率的な旅行は、いくつかの課題はあるものの世界的にも成功例の一つに挙げられるほどの水準になった。その後1990年代に入って、旅の一つの課題である観光バリアフリー化について取り組む時代になったが、高齢社会の急速な進展により、現在はより一般化したユニバーサルなツーリズムが求められる時代になったといえる。現代の「ユニバーサル・ツーリズム」とは、「年齢・性別、言語・国籍、能力のいかにかわらず、すべての人が同質で同等の旅の楽しみが享受できるツーリズム」ということができよう。この定義を言葉で表すことは簡単であるが、いざ実際に実現するとなると大変な目標である。「同質で同等の旅の楽しみ」の内容を考えてみよう。この達成の前提としては、(1)公平性(だれにでも)、(2)多様性(さまざまな)、(3)柔軟性(フレキシブルな)を基本として、機能的には、(4)旅の連続性(シームレス化)、(5)簡潔性(理解力と情報整備)、(6)価格合理性(コストパフォーマンス)、(7)安全性、(8)空間的余裕確保を備え、旅行者の側では、(9)旅そのものの持つ情動性(旅の感動)、(10)美的感覚などの五感による楽しみ、(11)時間的余裕(スロートーリズム)を備えなければならない。

この考え方に基いてユニバーサル・ツーリズムを実現するためには、旅行する側から見れば、旅行する人の身になった旅行の計画時から、旅行出発・旅行帰着までの総合的に配慮された旅行システムが必要であるし、観光地など観光対象側から見れば、社会都市環境・自然環境の総合的なユニバーサルデザイン整備が必要になる。実現のための具体的な整備項目としては、いわゆる「ハード面」における交通機関や建築物など都市環境におけるユニバーサルな施設整備、および「ソフト面」における人的サービス、情報・コミュニケーション面のサービス、医療介護サービスや非常時などの危機対応サービスなどが含まれる。

達成されるユニバーサル・ツーリズムの意義は次のようになるだろう。旅行者と旅行者を迎える人々がお互いを敬い、ホスピタリティをもって接することによって、旅行者は非日常における自然や文化の多様な楽しみ・体験を享受することができるし、その中から生きる意味を見出すこともある。また社会の側では、異文化間交流の促進、観光による経済効果、観光による社会基盤(インフラ)整備、交流による平和維持効果によって、高度な文化社会を築く礎となる。このようにユニバーサル・ツーリズムとは、次世代のための広大なツーリズム活動であるといえる。なおユニバーサル・ツーリズムの言葉は、正確には「ユニバーサラー・デザインド・ツーリズム」が適切であろうし、また近未来の人間中心の「ヒューマンセンタード・ツーリズム」ということもできるだろう。

[連載 第7回へ](#)

[バックナンバーから探す](#)

[2010年](#)

[2009年](#)

[2008年](#)

[2007年](#)

[2006年](#)

[2005年](#)

[トップ](#) > [実績](#) > [セミナー・講演・執筆](#) > 進化する観光ユニバーサルデザイン(連載)「旅行情報～入手法や表現に配慮が必要～」

セミナー・講演・執筆

進化する観光ユニバーサルデザイン(連載)「旅行情報～入手法や表現に配慮が必要～」

執筆

研究員名: 草薙威一郎

番組名・雑誌名: 公明新聞・執筆 2004年11月19日

放送局・出版社: 公明党機関紙局

【連載】進化する観光UD(7) 旅行情報～入手法や表現に配慮が必要～

公明新聞 2004年11月19日

JTMバリアフリー研究所所長・草薙威一郎

[←連載 第6回へ](#)

旅行に出かけるときには、旅行ガイドブックやインターネット、旅行会社パンフレット、旅好きな人の「口コミ」など、いろいろな方法で旅行情報を調べるものである。観光UDにおいても旅行情報は欠かせない。そこで今回は旅行情報のUD化について述べてみたい。

今から20年前に車いすの人が海外旅行をしたいと思っても、航空会社の対応は統一されておらず、海外ホテルのサービスや現地交通機関などの情報を日本で手に入れることは非常に大変だった。大変というよりは、海外の情報はほとんど皆無であったといえる。だからそのころの先人たちは、現地にいる知り合いに尋ねるか、到着してから行き当たりばったりで冒険するかしか方法がなかった。

現在でも「日本の中での車いすで行ける温泉旅館は、どこにありますか?」とか、「○○観光地は、バリアフリーになっていますか?」と言われて、自信を持って答えられるところは少ないのではなかろうか?この原因はたくさんある。

(1)信頼できる情報がどこで手に入れられるかわからない。(2)自分の障害の状態に合った施設であるかという、詳細で、かつ個別の情報についてはわからない。(3)適切な施設そのものが少ないうえに優良な施設であるかどうかの評価がなされていないので、回答があいまいにならざるをえないためである。

バリアフリー旅行情報の特徴としては、旅行行程中の車いすトイレ情報、鉄道など乗りものの乗換え情報、宿泊施設の設備情報、その他の医療情報、介護情報など、普通のガイドブックにある観光情報よりも多量で詳細な情報が旅行前に必要になる点がある。そして具体的に不足しているものがあれば旅行前に準備しなければならない。適切な施設がない場合には、コースを変更したり、場合によっては旅行を断念しなければならなかったりすることもある。

また一般的に発行されている「バリアフリーマップ」は車いす情報が中心であり、他にも目や耳の不自由な人への情報、人工透析・オストメイトなど内臓障害のある人への情報など多岐に渡る配慮も必要である。

情報の伝達方法では目や耳が不自由な場合には別の配慮が必要になる。点字や手話という従来の方法に加えて、最近ではインターネットやメールなどパソコンを利用する人も増えてきた。今年(2004年)になって、誰でもパソコンにアクセスしやすくなるための情報アクセシビリティ指針がJIS(日本規格協会)によって規格化された。

観光UDの情報については、課題はたくさんあるものの行政機関、民間団体、観光関連産業の努力で、近年になって少しずつ蓄積され豊富になっている。今後の課題としては、情報の発信側と利用者側で簡単に見つけて利用できるように努めるとともに、情報内容についても写真や絵文字(ピクトグラム)を使って理解しやすくしたり、優れているのか使いにくい点があるのかといった施設評価も含めた情報を整備したりする必要はあるだろう。

[連載 第8回へ](#)

バックナンバーから探す

[2010年](#)

[2009年](#)

[2008年](#)

[2007年](#)

[2006年](#)

[2005年](#)

[トップ](#) > [実績](#) > [セミナー・講演・執筆](#) > 進化する観光ユニバーサルデザイン(連載)「大型化する空港～移動・搭乗にキメ細かな工夫～」

セミナー・講演・執筆

進化する観光ユニバーサルデザイン(連載)「大型化する空港～移動・搭乗にキメ細かな工夫～」

執筆

研究員名: 草薙威一郎

番組名・雑誌名: 公明新聞・執筆 2004年12月3日

放送局・出版社: 公明党機関紙局

【連載】進化する観光UD(8) 大型化する空港～移動・搭乗にキメ細かな工夫～

公明新聞 2004年12月3日

JTMバリアフリー研究所所長・草薙威一郎

[←連載 第7回へ](#)

旅をするときには、家から目的地までさまざまな交通機関を利用する。新幹線を使ったり、マイカーを利用したり、時には飛行機を利用する。飛行機は、ひと昔前までホテルと同様、庶民的とは言えない高級な感じのする乗り物であった。ところが最近のわが国では、飛行機を利用する人が国内線だけで年間で延べ1億人弱に達するという。また国内観光旅行をする人全体の1割以上の人は飛行機を利用している調査結果もある。このように観光面でも身近な乗り物になった飛行機は、バリアフリー化、ユニバーサルデザイン化の面ではどのように進化しているのだろうか。

去る12月1日にオープンした羽田空港第2ビルを例にとって考えてみよう。この同ターミナルビルができて羽田空港の総建物面積は47万4千平方メートルになった。これは世界でも4番目の巨大空港に当たるという。また同空港の年間利用者数は国内線利用者の半数以上の約6千3百万人であり、一空港としては世界で6番目になる。

世界的にみても飛行機の大型化や利用便数の増加に伴い、空港は大型化している。利用者としては、レストランや店舗などさまざまな機能が付加されて利便性や楽しみが増える一面はあるが、一方では出かける際に空港に着いてから飛行機に搭乗するまでの移動距離が長くなり、搭乗までに時間がかかる面も出てくる。アメリカなどでは航空会社ごとにビルを持って、なるべく搭乗までの距離を短くして手続きを簡素化する傾向がみられるが、それでも多くの大型空港ではビルの前方が見えないくらいに巨大化している。

羽田空港第2ビルでも建物の長さが800メートル弱あり、搭乗口まで幅の広い「動く歩道」を設置したり、足の弱いお客様のための移動手段として「電動カート」を導入したりして、利便性を確保している。また同ビルでは、バリアフリー化、ユニバーサルデザイン化には力を注いでおり、多方面の工夫が見られる。

先ず空港に乗り入れるモノレールや鉄道とのアクセスが簡潔でわかりやすく、駅から出発フロアへのエスカレーター、エレベーター利用を楽にしている。ビル自体の屋根も高く見渡しが利くので迷いにくい。また案内ボードやブラズマディスプレイも大きく見やすい表示を採用している。大きな表示ボードの中には「○○まで××メートル」といった距離の表示もあり安心できる。次にチェックインカウンターからセキュリティチェックの場所を通ると、搭乗ゲートにゆく通路幅は広く、ゲート番号も見やすい。その先の搭乗口に着くと、待合スペースがゆったりとられており、飛行機への乗り口は到着用と搭乗用に分かれており混乱しにくい。特に評価したい点はトイレの充実である。空港内にはかなりの数のトイレが設置されており、それぞれに車いすやオストメイト、乳児対応などの多目的化が進んでいる。

また同ビルを主として利用する全日空(ANA)では、「らくのりサービス」として高齢の人、赤ちゃん連れ・妊娠中の人、一人旅の子供、ペット連れの人など何らかのお手伝いが必要とする人だけでなく、体の不自由な人へのさまざまな空港・機内サービスを充実させており、空のUD化は着々と進化しているといえるだろう。

[連載 第9回へ→](#)

[バックナンバーから探す](#)

[2010年](#) [2009年](#) [2008年](#) [2007年](#) [2006年](#) [2005年](#)

[トップ](#) > [実績](#) > [セミナー・講演・執筆](#) > 進化する観光ユニバーサルデザイン(連載)「旅館・ホテル1～快適な滞在へ専門サービスも～」

セミナー・講演・執筆

進化する観光ユニバーサルデザイン(連載)「旅館・ホテル1～快適な滞在へ専門サービスも～」

執筆

研究員名: [草薙威一郎](#)

番組名・雑誌名: 公明新聞・執筆 2004年12月10日

放送局・出版社: 公明党機関紙局

【連載】進化する観光UD(9) 旅館・ホテル1～快適な滞在へ専門サービスも～

公明新聞 2004年12月10日

JTMバリアフリー研究所所長・草薙威一郎

[←連載 第8回へ](#)

国内旅行では、その日のうちに帰ってくる「日帰り旅行」と宿泊を伴う「宿泊旅行」というわけ方がされる。

このうち宿泊旅行をみてみると、今年の「観光白書」(国土交通省編)によれば、昨年1年間の国内宿泊旅行回数は、国民全体で延べ2億6,900万回と推計されている。この数字をもとに宿泊先について日本観光協会動向調査から宿泊人数を推計すると、ホテル・ビジネスホテルがもっとも多くて4割弱、人数では約1億人、旅館が2位で3割強、人数では約9千万人、その他の公的宿泊施設、寮・休養所、ペンション、民宿を合わせて2割弱、人数では約5千万人、残りは知人・親戚宅、車・船中泊となっている。また一方、旅館業法による統計によれば、わが国にはホテルが約8,500軒、旅館が約6万1千軒あるといわれる。

そこで今回と次回の2回に分けて、宿泊施設の中でも代表的な旅館とホテルの進化するUDについて説明したい。

ホテルが洋風、旅館が和風という違いはあるものの、旅館・ホテルとも「安全で快適な宿泊の提供」という本来の機能は同じである。宿泊施設の中で、利用者は睡眠、食事、入浴といった日常生活と変わらない行動をするものの、その設備や機能、雰囲気は家庭とは異なる。また行動する空間も客室内だけでなくレストランや大浴場など、家庭とは異なる社会性をもった場所で行動する。

そこでも、年齢・性別、言語・国籍、能力のいかんにかかわらず、すべての利用者に円滑で快適なサービスを提供するというUD化の原則は同じである。即ち利用する施設に容易に到着できること、施設内の利用する場所に不自由なく行けること、滞在中の多様な行動に不自由を感じることなく対応できること、単に機能的に対応できることだけでなく、すべての利用者が尊厳をもつお客様として尊重され、かつ非日常を味わい快適に過ごせることが必要である。こ

れらのことは「あたりまえ」といえば「あたりまえ」であるが、実行することはかなりの努力が必要になる。具体的には、(1)すべてのお客様が利用できる館内のハード面(客室、トイレ、大浴場など)のUD化整備、(2)すべてのお客様に、公平で暖かいサービスが提供できるためのスタッフ教育、(3)バリアフリー設備やサービスに関するきめ細かい情報提供、(4)非常時、災害時に対する安全対策などを行わなければならない。また個々の宿泊施設においては、手話によるコミュニケーション、ヘルパーによる入浴介助など特徴ある専門的サービスをしている宿泊施設もある。

近年、UD化に努力しているホテルや旅館は全国的に確実に増えている。それらの施設は、特別の配慮を必要とするお客様にハード面で利用しやすいだけでなく、働くスタッフもすべてのお客様に優しく接するようになる。それを継続して行うことによって、結果的に全体的に評判の良い優れた宿泊施設に成長している。

そこで今回は旅館やホテルの具体的なハード面などの説明を行うことにしたい。

[連載 第10回へ](#)

[バックナンバーから探す](#)

[2010年](#)

[2009年](#)

[2008年](#)

[2007年](#)

[2006年](#)

[2005年](#)

[トップ](#) > [実績](#) > [セミナー・講演・執筆](#) > 進化する観光ユニバーサルデザイン(連載)旅館・ホテル2～予約時点で要望を出して確認～

セミナー・講演・執筆

進化する観光ユニバーサルデザイン(連載)旅館・ホテル2～予約時点で要望を出して確認～

執筆

研究員名:草薙威一郎

番組名・雑誌名:公明新聞・執筆 2004年12月17日

放送局・出版社:公明党機関紙局

【連載】進化する観光UD(10) 旅館・ホテル2～予約時点で要望を出して確認～

公明新聞 2004年12月17日

JTMバリアフリー研究所所長・草薙威一郎

[←連載 第9回へ](#)

今回は、宿泊施設の進化するUDの現状について、シティホテルに宿泊する場合を想定して、予約から順に説明してみたい。

(1)予約・情報のUD

宿泊するときに何らかの配慮を必要とする場合には、円滑で快適に過ごせるように、そのホテルにどんな設備やサービスがあるのか、自分にあった対応をしてくれるのか、たぶん前もって尋ねるだろう。

例えば車いす対応の客室やトイレがあるのか否か、食事制限のある人に対応する食事が用意できるのか否かというようなことである。旅慣れた人に聞くと、そのときにあやふやな答えをせずにきちんと答えるところ、電話の声に暖かくお迎えする気持ちがかもっているホテルは、まず間違いのないところだという。

一般的には、ハートビル法に準拠した施設、県や市の発行するバリアフリー基準に適合した施設は、優良な施設であるといえるが、残念ながらその数はまだ多くない。ホテル側で「バリアフリー対応」とうたっているも、自分の場合にフィットするかどうか、きちんとこの時点で要望をだして確認しておくことが大切である。

(2)ホテル到着

まずホテルまでどのようにして行くか、駐車場はどうなっているかというアクセス情報は重要である。フロントでは車いすのお客様への低いカウンター、耳の不自由なお客様へ手話のできる係員の配置、目の不自由なお客様への代筆記入や案内など、さまざまなサービスを提供するホテルも増えている。またこのホテル到着時でも、予約の時点で依頼した要望がきちんと配慮されているか確認することも大切なことである。

(3)ホテルの客室

昨年(2003年)に改定されたハートビル法では「車いす使用者用客室」の基準を定めている。具体的には、「客室と浴室の出入り口幅は80cm以上」であり、「ドアは車いす使用者が通過しやすく、前後に水平部分を設けて」おり、「客室内部は車いすで利用しやすいように十分な空間が確保されて」おり、「浴槽やトイレに手すりや適切に配置されている」ことである。そして可能な限り、このような客室を全客室数の2%以上(300室のホテルであれば6室以上)用意することを求めている。この基準のほかにも、耳や目の不自由なお客様や高齢のお客様にさまざまなサービスを提供するホテルも増えている。

(4)ホテル内の各施設の利用

ホテル滞在では客室ばかりではなく、レストランや宴会場などいろいろな施設を利用する。そのようなところでは、段差がないか、その場所にはスロープなどが用意されているか、子供づれ・オストメイト(人工肛門・人工膀胱)・車いすなど誰でも使えるトイレがあるかなどの配慮も大切である。また一方で高齢の人や外国人、耳の不自由なお客様など、誰でもわかりやすい館内案内図や館内表示も、滞在中に不安を感じさせない配慮として大変重要なことである。

今回はホテルを例にとって宿泊施設のUDについて述べたが、同じ宿泊施設でも旅館の場合では、タタミの部屋を利用したり温泉などの大浴場があったりするので、より進化したUDの工夫が必要である。今後も宿泊施設については更なる知恵の結集が必要になるだろう。

[連載 第11回へ](#)

[バックナンバーから探す](#)

[2010年](#) [2009年](#) [2008年](#) [2007年](#) [2006年](#) [2005年](#)

[トップ](#) > [寒催](#) > [セミナー・講演・執筆](#) > 進化する観光ユニバーサルデザイン(連載)クリチバ市(ブラジル)～人間中心の都市づくりに注目～

セミナー・講演・執筆

進化する観光ユニバーサルデザイン(連載)クリチバ市(ブラジル)～人間中心の都市づくりに注目～

執筆

研究員名: 草薙威一郎

番組名・雑誌名: 公明新聞・執筆 2005年1月7日

放送局・出版社: 公明党機関紙局

【連載】進化する観光UD(11) クリチバ市(ブラジル)～人間中心の都市づくりに注目～

公明新聞 2005年1月7日

JTM/バリアフリー研究所所長・草薙威一郎

[←連載 第10回へ](#)

昨年12月、ブラジルのリオデジャネイロ市において3回目の国際ユニバーサルデザイン会議が開催された。世界各国から多数の人々が参加するなかで、日本からの参加者も積極的に研究発表やUD商品の展示を行った。市内へ出てみると、有名観光地であるコルコバードの丘やシュガーローフ(砂糖パン山)でも、車いす観光客に対応できるようなエレベーターやロープウェイが設置されていたのが印象的であった。

会議後に、リオデジャネイロから西へ空路1時間半の距離にあるパラナ州・州都クリチバ市を回る機会があった。人口160万人のクリチバ市は、1992年の国際環境会議において環境政策で表彰されて以来、世界の耳目を集めてきたが、クリチバは環境政策だけでなく、「人間を中心とした都市づくり」をめざして、交通政策、土地利用政策、都市デザイン政策、緑地政策など「都市計画の奇跡」と呼ばれるほどの成果を挙げってきた都市である。クリチバにおける主要交通機関は、縦横無尽に張り巡らされたバス網である。実際に連結バスに乗ってみると、日本のバスとは異なり、バスはバス専用レーンを電車並みのスピードで飛ばしている。もし乗り遅れたとしてもバスの運転間隔が短いので、すぐ次のバスが来る。また郊外には20近くのバスターミナル拠点があり、このターミナルを中心の一つひとつの衛星都市を作っている。個々のバス停留所は特徴あるチューブ型で、入り口に4、5段の階段はあるものの、備え付けの電動リフトで車いす利用者は簡単に停留所上へ上がることができる。またクリチバは商店・事務所などの入った高層ビルが幹線道路沿いにしか建てられないため、20階建て30階建てのビルが線上に郊外に延びる独特のスカイラインを作っている。「花通り」など市の中心市街地には車が入れないように「歩行者天国化」を進める一方で、郊外には植物園、オランダ公園、タンガア公園、オペラハウス、環境大学など、市民や近郊からの人のための緑豊かな観光地を作っている。クリチバは市民一人当たりの緑地面積は55平方メートルと東京都の4平方メートルに比べて10倍以上の緑の町である。我々が訪れたのが日曜であったせいもあるが、どこの観光地でも多くの市民がゆったりと思いつい思いつの楽しみ方をしていた。また空港やまちなかのごみかごは、6種類の色分けされており、徹底した分別ごみ回収システムをとっている。

ここまで人間中心の都市システムを実現させた要因を、ハビタット・デザイン研究所・服部圭郎氏は「市長の強い政治的意思」、「政策の継続性」、「都市計画専門家集団の存在」、「柔軟な計画遂行システム」の4つに集約している。我々が公園で出会ったクリチバ生まれの日系人女性は、「クリチバは、ほど良い町の大きさです。緑が多くて、本当に住みよいところです。」と笑顔で話してくれた言葉が印象に残った。

お勧め参考図書:

服部圭郎著『人間都市クリチバー環境・交通・福祉・土地利用を統合したまちづくり』学芸出版社 2004年

[連載 第12回へ](#)

バックナンバーから探す

[2010年](#)

[2009年](#)

[2008年](#)

[2007年](#)

[2006年](#)

[2005年](#)

[トップ](#) > [実績](#) > [セミナー・講演・執筆](#) > 進化する観光ユニバーサルデザイン(連載)旅行会社～誰もが利用できる旅を企画～

セミナー・講演・執筆

進化する観光ユニバーサルデザイン(連載)旅行会社～誰もが利用できる旅を企画～

～

執筆

研究員名: [草薙威一郎](#)

番組名・雑誌名: 公明新聞・執筆 2005年1月14日

放送局・出版社: 公明党機関紙局

【連載】進化する観光UD(12) 旅行会社～誰もが利用できる旅を企画～

公明新聞 2004年11月14日

JTM/バリアフリー研究所所長・草薙威一郎

[←連載 第11回へ](#)

今回の「進化する観光UD」では、旅行者と観光地を結ぶ役割を果たしている旅行会社のUDの現状と利用法について考えてみたい。

全国で登録されている旅行会社は約1万社あるといわれ、(1)国内・海外に関する旅行相談や旅行案内、(2)航空機、鉄道、ホテル、旅館などの予約・発券、(3)パッケージ旅行の企画、募集、販売、(4)団体旅行の営業や手配、添乗など旅行に関わるさまざまな仕事を行っている。また最近では、既存の旅行会社とは別にインターネットや通信販売を利用した旅行会社も増加している。

昨今一般的になってきた「バリアフリー旅行」は、30年ほど前に車いす利用者のための海外団体旅行から始まったといわれる。もちろんパラリンピック(スポーツ大会)やアビリンピック(技能大会)の参加旅行は少し前から始まっていた。また1980年ごろに、海外の病院で透析療法の必要な人のための旅行も始まり、同じころ医師が同行するリッチな海外旅行も出現した。1990年代に入ると旅行会社募集の車いすツアーや90年代半ばには盲導犬同伴海外旅行も始まった。そして90年代後半になるとバリアフリー旅行専門の旅行会社やバリアフリー旅行専門部署をもつ旅行会社も出現して今日を迎えている。

最近も車いす利用のお客様、目や耳の不自由なお客様、内部疾患のあるお客様、知的障害や精神障害のあるお客様、配慮の必要な高齢のお客様などの旅行を扱う旅行会社は年々増加しているという。バリアフリー旅行の増加につれて、旅行の業界団体であるJATA(日本旅行業協会)でも、旅行会社向け受入れガイドラインを整備したり、受入れマニュアルを作成したりするなど普及に努めている。

また特定のお客様層のバリアフリー旅行だけではなく、だれでも広い範囲で参加可能なユニバーサルデザイン旅行とも言える多様な広がりが出てきた。旅行の参加形態としては、(1)オーダーメイド型の旅行(かなり特別な配慮が必要な人が多い)、(2)レディメイド型の旅行(旅行会社の募集するバリアフリーツアーや一般パッケージ旅行、格安航空券旅行)、(3)スポーツや特定の趣味の仲間など特定の目的をもった旅行に分けられるが、それぞれで旅の工夫を加えている。旅行会社の選び方としては、親身になって相談ののってくれること、バリアフリーのホテルやリフト付きタクシーなどの情報が豊富であること、添乗員や係員に対してUD社員教育を実施していることなどを目安にすると良いだろう。

一方旅行会社の人に最近の傾向を聞くと、以前はUD化の進んだ目的地を探して旅行を選ぶ傾向はあったが、最近ではUD化が進んでいるかということよりも旅行先で自分のしたいことをできるか、見たいところへ行けるかといった個人の旅の希望を優先する形が増えてきたという。このことは、それだけ観光のUD化が進んできていることを表しているのではないかと考えられる。

[連載 第13回へ](#)

[バックナンバーから探す](#)

[2010年](#)

[2009年](#)

[2008年](#)

[2007年](#)

[2006年](#)

[2005年](#)

[トップ](#) > [実績](#) > [セミナー・講演・執筆](#) > 進化する観光ユニバーサルデザイン(連載)トイレの設置と仕様～使う側の目線からの再考が必要～

セミナー・講演・執筆

進化する観光ユニバーサルデザイン(連載)トイレの設置と仕様～使う側の目線からの再考が必要～

執筆

研究員名: [草薙威一郎](#)

番組名・雑誌名: 公明新聞・執筆 2005年1月21日

放送局・出版社: 公明党機関紙局

【連載】進化する観光UD(13) トイレの設置と仕様～使う側の目線からの再考が必要～

公明新聞 2005年1月21日

JTMバリアフリー研究所所長・草薙威一郎

[←連載 第12回へ](#)

観光UDの話題になるとトイレに関することになる場合が多い。例えば車いす利用の人からは「航空機の中のトイレは狭くて、車いすのままでは利用しにくい」、「旅館やホテルに車いすでも利用できるトイレが無いと食事が楽しめない」、「高速道路・サービスエリアの障害者用駐車スペースに、一般の車が止まっていて駐車できないので、トイレに行けない」とか、また目の不自由な人からは「そもそもどこにトイレがあるかわからない」「男性用と女性用の区別がわからない」「最近では水の洗浄のしかたがたくさんあるので、どうすれば水が流れるのかわからない」とかの声もある。そこで今回は、旅とトイレのことを話題にしたい。

車いすの人でも利用しやすいトイレ(以下「車いす対応トイレ」と略す)の名称については、「身障者用トイレ」の他にも「多目的トイレ」「多機能トイレ」「ゆったりトイレ」「だれでもトイレ」など、全国さまざまな名称で呼ばれている。

大体の共通した仕様は、(1)大きさとしては2メートル四方であり、トイレの中の設備は(2)手すりつきの洋式トイレ(最近ではウォシュレット付きも多い)、(3)手すりつき洗面台、(4)折りたたみベッド(子供用の場合もある)、(5)赤ちゃん用腰掛け、(6)オストメイト用洗浄器(最近のトイレのものに多い)、(7)非常用呼び出しボタンなどが装備されている。もちろん、このトイレは車いす利用者だけでなく、知的障害のある人や高齢の人、赤ちゃん連れの人などにも大変便利なものである。

海外から来た人からは、この種の「フル装備」のトイレを見ると、欧米の人も含めて大変立派なトイレであると一様に驚嘆される。もちろん欧米でも車いす対応トイレはかなり普及しているものの、トイレ内の設備についてはシンプルなものが多い。

ただ、この立派な車いす対応トイレにも課題は多い。

まずそのトイレの数が圧倒的に少ないことである。新しい公共施設や駅などでは大体設置されて来ているものの、古くからの飲食街や温泉街ではほとんど見られないので探すのに大変苦労する。この点アメリカのADA法では、不特定多数の人が利用する個室(便所)が6個以上あるトイレでは公共施設・商業施設にかかわらず、そのうち1個以上の個室では両手すりをつけて車いすの人も出入りできるドア幅を確保することが義務付けられている。

またわが国ではトイレのメンテナンスの不十分さなどから本来の目的以外使用や、障害のある人の優先利用が優先度合無く利用するかといった運営上の課題もあげられている。先般の交通バリアフリー法によるトイレ設置については、車いす対応トイレのほかに、「簡易便所」というフル装備ではない簡易化されたトイレを多数設置する提案も行われている。2004年にDDA法(英国障害者差別禁止法)が完全施行された英国では、普通トイレを車いす対応トイレへ改造する費用負担やメンテナンス費用増加のために、返って車いす対応公衆トイレが閉鎖される事態が増加しているとの話も最近聞いた。

どのようなトイレがどこにあれば安心して旅ができるのか、再度考え直す時代がそこまで来ているような気がしてならない。

[連載 第14回へ](#)

[バックナンバーから探す](#)

[2010年](#)

[2009年](#)

[2008年](#)

[2007年](#)

[2006年](#)

[2005年](#)